



が明治32年2月に発行されており、それより後の日付は「沖縄風俗絵巻」以前にはない。

したがって「沖縄風俗絵巻」は、明治32年2月以降に受け入れた可能性が高いことになる。

ただ、そうすると池宮先生の推定された「明治初年から半ばにかけて」という制作年代との間にすこしばかりズレが生じる。

### 2. 南嶋探検

次に、「沖縄風俗絵巻」を入手したいきさつがわかれば日付を絞り込めるのではないかと思い、文献資料をあたることにした。

小野先生が「いれずみ物語6」（大塚薬報 No.617）で参考文献として上げられている笹森儀助の「南嶋探検」は、日清戦争（明治27～28年）直前の明治26年に笹森が「約5ヶ月間にわたり踏査した南島の実態を、漢文訓読体によって、克明に記した記録」である。

第五高等学校との関連でいうと、「南嶋探検」の成立に時の文部大臣で熊本出身の井上毅が深く関わっていたらしい。

参照してみると、なかに女性の手の甲に描かれた入れ墨の図がある（東洋文庫411「南嶋探検 1琉球漫遊記」181～182ページ）。これは「沖縄風俗絵巻」に描かれたものとは異なる文様の入れ墨である。

無理をすれば明治26年を「半ば」と言えないこともなさそうなので、「沖縄風俗絵巻」の招来について笹森が言及もしくは関与していないかと思ったが、そのような記事は見つけれなかった。

### 3. 龍南会雑誌

「龍南会雑誌」は旧制第五高等学校の校友会誌で、明治24年から昭和19年まで全254号が発刊された、わが国における校友会誌として旧制第一高等学校の「校友会雑誌」に次ぐ歴史と発刊号数を誇るものである。

最近、熊本近代文学研究会の手によって、全号の目次が修正加筆のうえ検索可能な形で提供されたので、図書館ホームページに上げる準備をしていたところを利用させてもらうことにした。

まず試しに“琉球”で検索したところ、思いがけず第75～77号（明治32～33年）に掲載された記事がヒットした。

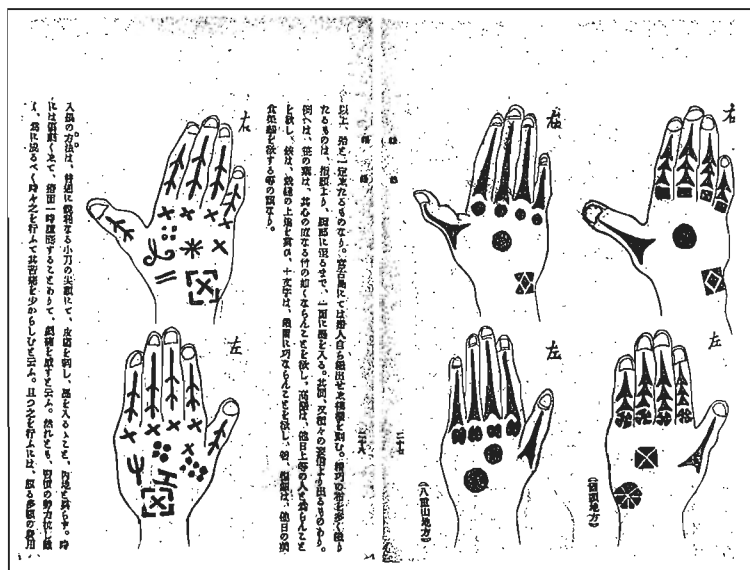
当時第五高等学校の教授であった武藤虎太の講演を筆記したという『琉球』。

日清戦争後、日露戦争（明治37～38年）を控えた明治32年7月から8月にかけて、武藤が19日間の沖縄出張旅行を行った成果を述べたものである。

「沖縄風俗絵巻」の招来については言及されていなかったが、代わりに興味深いものを発見した。それは「南嶋探検」と同じく女性の手の甲に描かれた入れ墨の図である（第77号27～28ページ）。

ここに「沖縄風俗絵巻」の文様と、「南嶋探検」の文様がふたつ並べて掲げられている。まるで武藤の「琉球」が「南嶋探検」と「沖縄風俗絵巻」を繋いでいるようにもみえる。

どうやら武藤は、明治27年に発行された「南嶋探検」に目を通しており、「沖縄風俗絵巻」の招来にも何らかの関わりを持っていたらしい。



龍南会雑誌

#### 4. 復命書

書面で提出する出張報告のことを「復命書」という。

小野先生の調査依頼を受けた五高記念館友の会の東孝治事務局長によって、武藤の沖縄出張の「復命書」が発見された。

内容は簡単なもので、

明治32年7月17日に熊本を発ち鹿児島を經由して26日に那覇着、県庁を訪ねて調査方針について相談したうえ、県庁所蔵の史料12点42冊を借り出して旅館に持ち帰った。

27日は首里の中学校と師範学校を訪ね聞き取り調査を行った後、史料6点6冊を借りた。

28日は首里の小学校を訪ねた後、「中城御殿」で「書画宝物書籍ヲ展陳」されている内、主な史料12点20冊その他（「数十部」とある）を閲覧した。

29日以降は首里と那覇の旧跡を訪ねつつほとんどの時間を旅館での史料調査に費やした。さらに県庁などから史料7点34冊を借り、また聞き取り調査を行った。

帰りには鹿児島で史料（「薩藩日記」）を閲覧し8月11日に帰校した、とある。

「中城御殿」で「展陳」されていた「書画」の内に「沖縄風俗絵巻」も含まれていて、何らかの事情でそれを武藤が持ってきた可能性もあると思われるが、証拠はない。

#### 5. 明治天皇紀

「明治天皇紀」は明治天皇の誕生から崩御まで61年間（嘉永5年～明治45年）に及ぶ日々の動静を詳細に記述したものである。

我々が「沖縄風俗絵巻」を初めて見たときに気づいたのは、表装の仕方がほかの巻物と異なり、掛け軸のように布地が絵の左右天地を囲んだ形で貼られていたことである（原状のままでは保存に適さないので、修復する際に通常の形態に変更することになった）。

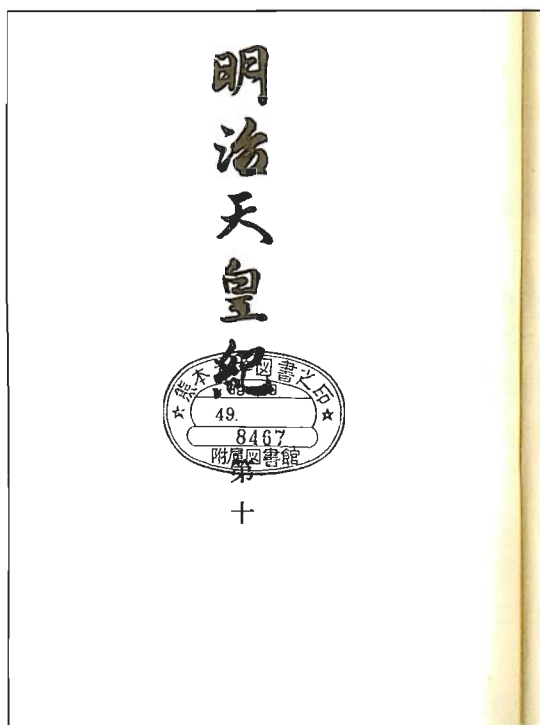
幅30cm長さ20m超の細長い巻物をわざわざ掛け軸のように表装するという事は、その大きさに見合った場所を用意する必要があるのでは、美術館などへの展示か、またはある程度位の高い人物を対象とする陳列・展示を目的としたのではないかと（これはまた、そもそも表装がどこで行われたかという疑問にも関連しているが）。

ちょうどその頃、明治天皇が明治35年に九州巡行を行ったと書かれているものを読んだ。そこで、関連性は低いと思いながらも「明治天皇紀」のページを開いてみることにした。

すると明治35年11月13日に、「是れより先、文部大臣、車駕西幸の次を以て特に第五高等学校に臨幸あらせられんことを内請す、是の日供奉の彰仁親王を遣はして之れを視しめたまふ（317ページ）」とある。ひょっとするとこの時に展示したのかもしれない。

#### 6. 五高五十年史

「五高五十年史」は昭和13年に開校50周年を記念して出版された、明治21年から昭和12年までの第五高等学校の歴史を叙述したものである。編纂



明治天皇紀 第十

は高森良人教授。

小松宮彰仁親王が第五高等学校を訪問したとすると、それは重要な出来事として「五高五十年史」に記載されていないといけない。

目次を見ると「第四篇第一章補遺一 各宮殿下の台臨並に奉送迎」として章立てされている。

「小松宮殿下」は明治30年11月4日にも第五高等学校を訪ねていた。したがって明治35年の訪問は二度目ということになる。

この時、「教室内に陳列せる図書・標本・機械及び生徒の成績品を御巡覧(448ページ)」されたというが、「沖縄風俗絵巻」についての言及はない。あるいは彰仁親王以外の皇族が見たのではないか。

そこで、念のために他の殿下の項を確認してみると、あった。

「皇太子殿下(後の大正天皇)」が明治33年10月21日から23日にかけて「御微行」の際、他の資料と共に「沖縄風俗取調書一冊、沖縄風俗絵画一巻(以上、武藤教授が、校命に依り実地に就いて取調べたもの)」を「台覧に供し奉った」という。

ちなみにこの時、「沖縄風俗絵巻」以外はすべて東京へ持ち帰ったらしい(451ページ)。

「沖縄風俗絵巻」を残した理由は不明だが、この記事から、すでにこの時点で「沖縄風俗絵巻」が巻物の形態であったこと、武藤が現地で調査した成果と認識されていることはわかった。

### 7. 図書原簿

こうしている間に、探していた「図書原簿A」が見つかった。蔵書番号から確かめると「沖縄風俗画」を明治33年8月1日に受け入れたと記載されている。しかし、何となくおかしい。

No.1~1164が同じ日付で受け入れてあって、[摘要]欄に「現在」と書き込まれている。どうやらこれは「転記」されたものらしい。

もう一度探し直して、その元帳というべき「図

16	丁程之化	中野誠徳編	1	4	1	
17	集古源華帖	森川正典編 文政十一年	1	5	31.3	3,500
18	二國筆海金書	藤通貞幸撰 慶安二年付	1	20	32.3	10,000
19	倭才光 (在唐時版)	宇奈摩翁撰 同治八年五月	1	3	32.5	1,000
20	尚古圖録	横山由清撰	1	2	32.10	1,800
21	集古十種	松平定信編 明治十一年刊	1	88	32.11	60,500
	總目録七部	一冊、	碑銘七部	十二冊、		
	鐘銘七部	九冊、	甲冑七部	十二冊、		
	旛旗七部	五冊、	牙矢七部	二冊、		
	樂器七部	六冊、	大牙七部	一冊、		
	印章七部	七冊、	扁額七部	十冊、		
	古畫月像七部	五冊、	七祖贊七部	二冊、		
	刀剣七部	二冊、	馬具七部	三冊、		
	銅器七部	二冊、	小倉色紙	一冊、		
	名書七部	一冊、	杖頭三關八景	一冊、		
22	沖縄風俗画		1	1	32.12	7,000
23	梅園奇賞	野里梅園撰	1	2	33.4	2,100

図書原簿B(部分)

書原簿B」によりやくたどり着いた。

こちらによれば、受け入れは明治32年12月、つまり武藤が出張から戻って4ヶ月後のことである。

この転記が行われた理由は、おそらく最初の「図書原簿B」が一冊の帳簿を「第一門哲学・宗教」から「第十五門雑書(図書館管理法)」まで分類別に数ページずつ区切って作られていたためである。

バインダー方式ではないので、個々の分類ごとに割り振られたページ数を超えて記帳できないということに誰かが気づいたのだろう。ここで“通し番号”方式に切り替えている。

### まとめ

このように、「沖縄風俗絵巻」が旧制第五高等学校の蔵書となった日付は(年月だが)明治32年12月と確認できた。

しかし、その“いきさつ”はいまだ定かではない。ここで一応のまとめとして、今回の調査の過程で判明したことがらに勝手な想像を付け加えてみることにする。

- ① 明治26年に笹森が「南嶋探検」を行って翌27年に刊行する。
- ② 日清戦争後、明治32年に武藤が沖縄に出張し



沖縄風俗絵巻

て資料を“収集”する。

おそらくこの時に、中城御殿で「展陳」されていた「沖縄風俗絵巻」も収集したのではないか。そう考えれば、池宮先生の推定された制作年代とのズレにも説明がつく。

- ③ 帰校して「復命書」を提出するとともに講演を行い、それが「龍南会雑誌」に翌年まで三号にわたって掲載される。
- ④ 12月に蔵書として登録される。  
 それでは、表装したのは一体いつのことか。帰校から四ヶ月しか経っていないので、無理とはいえにせよ、この間に表装したとは考えにくい。収集の時点ですでに表装されていたと考えた方が自然ではないか。もちろん、登録後に表装された可能性も残されてはいる。
- ⑤ 明治33年10月に「沖縄風俗絵巻」を皇太子の「台覧」に供する。

ただし、以上はあくまでも限られた範囲での調査結果をもとにした“推測”にすぎない。

「沖縄風俗絵巻」についてはその作者をはじめ不明な点が極めて多い。専門家による今後の研究

に期待したい。

備考：

調査にあたって使用した資料の著者名等についてはすべて敬称を略した。

うらたひろおみ 副課長

### 黒髪界限拾遺

明治末期から大正初期までの10年に満たないわずかな期間だが、赤門の前を玩具のように小さな蒸気機関車が一两だけの客車を引いて通っていた。熊本軽便鉄道。

小馬力のために上り坂では乗客が下りて皆で押したらしい。蒸気機関につきものの煤煙は、市内では随分と嫌われたようだ。

それでも最盛期には熊本市内から大津町までの路線を運行していた。

やがて大量輸送時代の訪れとともに姿を消すことになる。